2024年08月30日

「デュアルカンファレンス」で医学教育を効率化

Doctors Next（編集部）

全国医学部長病院長会議の「大学病院における医師の働き方に関する調査研究報告書」では、大学病院の医師の業務時間の半分以上を診療が占め、教育に費やす時間は週に5.9時間（10.7%）に過ぎないことが報告されている。また、医師の働き方改革の実施により勤務時間が厳格化されたことから、業務の見直しやタスクシフト、労働環境の改善に加え、ICTによる業務効率化が求められている。聖マリアンナ医科大学脳神経内科学講師の伊佐早健司氏は、医学教育の効率化を目指した「デュアルカンファレンス」について、第56回日本医学教育学会（2024年8月9～10日）で紹介した。

目次

カンファレンスに「Google Classroom」を併用
通常のカンファレンスのデメリットを解消

カンファレンスに「Google Classroom」を併用

ICTによる業務効率化は、ツールのデジタル化であるデジタイゼーション（例：電子カルテ）、プロセスのデジタル化であるデジタライゼーション（新たな価値やシステムの創出）、モデルや組織の変革であるデジタルトランスフォーメーション（DX）から成る。伊佐早氏は、こうした効率化を診療だけでなく学生の教育にも応用できると考え、臨床実習における症例カンファレンスへの活用を試みた。

学生の教育において、カンファレンスには「他者の経験を共有できる」「議論により理解が深まる」「知識が整理できる」などのメリットがある一方、「教員の解説により進行が遅延する」「進行阻害を懸念して学生が質問を遠慮する」「内容を聞き取れないことがある」などのデメリットがある。

そこで、同氏は実際のカンファレンスと「Google Classroom（GCR、指導と学習を一元管理できるアプリ）」を用いたカンファレンスを並行して行う「デュアルカンファレンス」を考案した。同科では新型コロナウイルス感染症により病棟実習が行えなかった際、代替としてクルズス（研修会や勉強会）の配信や処置動画の視聴などのためにGCRを導入。病棟に入室可能になってからは、実習の効率化を目的にGCRを用いたデュアルカンファレンスが実施された。

通常のカンファレンスのデメリットを解消

デュアルカンファレンスでは、実際のカンファレンスで年齢や性、症状や経過などに基づく治療方針の検討や画像提示などを行い、GCR上では疾患の基本的事項の確認と回答、カンファレンス内容の質問などが行われる。また、動画やWebページのURLを共有したり、疾患特有の略語を解説したりするなど、実際のカンファレンスの補助として機能する。必須の確認事項は事前に用意するなど、カンファレンス中に不要な時間を割かない工夫もなされているという。

通常のカンファレンスは「対面でリアルタイム（同期）」、Web会議は「非対面で同期」、オンデマンド配信は「非対面で非同期」だが、デュアルカンファレンスは実際のカンファレンスは同期で行い、GCR上で情報を共有して蓄積できるため「対面で同期、かつ非同期」である。そのため、通常のカンファレンスのメリットに加え、「進行を妨げずにリアルタイムに質問できる」「動画や資料を共有できる」「複数名の指導医による多層的な教育体制を構築できる（より専門的な解説が可能）」「動画や教育内容を蓄積できる」などのメリットがある。ただし、GCRの使用に慣れる必要があり、また、学習効果が検証されていないなどのデメリットもある。

以上を踏まえ、伊佐早氏は「デュアルカンファレンスは『対面で同期』のカンファレンスを拡張し、GCR上に学習履歴を蓄積可能な時間的・空間的な制約が少ない学びの場を提供できる。代替手段としてのICTの『導入（デジタイゼーション）』が『統合（デジタライゼーション）』に至った好例であり、今後は診療や教育、研究に変革をもたらす医療DXを目指していきたい」と結論した。

一覧へ戻る

Copyright © DOCTORS Inc. All Rights Reserved.